

奄美から講義を同時配信

筑波大センター 特別支援教育で東京、石垣と結ぶ テレビ会議システムを利用

筑波大学特別支援教育研究センター（東京、前川久男センター長）は二十日、奄美市名瀬でテレビ会議システムを利用した軽度発達障害児の特別支援教育の講義を配信する実験を実施した。同センターの瀬戸口裕二教諭（四九）が「特別支援教育の課題と支援システム」をテーマに講義、東京、沖縄の研修会場へ同時配信した。

同センターが取り組む「eラーニングを活用した連携事業に関する配信事業」の一環。筑波大東京キャンパスと、地理的条件から研修が困難な奄美市、沖縄県石垣島、北海道名寄市にサテライト拠点を設置し、来年三月まで特別支援教育に関する講義を行う。奄美に居ながら受講可能となる。



テレビ会議システムを利用して行われた特別支援教育の研修

神経系の機能不全の疑い」などと指摘した。共通する支援法として①苦手な部分の克服より得意な分野を生かす②目標のハードルを少し低くする③完ぺきを求めない④多様な評価をする⑤チームで支援する雰囲気と態勢を整えるなどを挙げた。また、小中学校の特別支援教育コーディネーターが「チームで支援する場合のキーパーソン」と、その重要性を指摘した。

一回目以降の講義内容は「軽度発達障害児の理解」「学校における配慮と支援」「発達障害と医療」「行動面の特性と指導」「運動面の特性と指導」「包括的な支援」。次回回は北海道、三回目沖縄、四回目以降は東京の筑波大から配信する予定。初講義を終えた瀬戸口教諭は「不安もあったが、トラブルも無く良かった。予算的に可能ならば最終講義は再び奄美から行いたい」と話した。

A i A iひろばであった初講義には、研究協力する県立大島養護学校や近隣小中学校教職員、福祉施設職員、NPO（非営利活動団体）関係者ら二十人が参加し、インターネット回線で東京と石垣島の八重山養護学校を結んで実施した。石垣島会場には百人を超える参加者があった。

瀬戸口教諭は、学習障害（LD）や注意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能自閉症など軽度発達障害の子供への支援の基本的な考え方として「本人のわがままや努力不足のせいではない」「家庭の育て方やしつけ、先生の指導力の問題ではない」「原因として中枢